地域活性化事業交付金

活用事例集

相模原市　緑区

目　　次

地域活性化事業交付金とは…… 1

橋本地区
1　おもちゃの広場による多世代交流…… 3
2　コミュニティカフェ（地域食堂）…… 5
大沢地区
3　散歩普及のためのオレンジバンダナ配布事業…… 7
城山地区
4　しろやま☆おせっかい…… 9
5　城山湖ヒルクライムアタック雌龍籠山ステージ…… 11
6　みんなの津久井湖夏祭り…… 13
津久井地区
7　米・大豆等の栽培で持続するまちづくりを目指す事業…… 15
8　鳥害獣の食害防止・駆除により農林業の促進を図る…… 17
9　自然災害伝承事業…… 18
相模湖地区
10 わくわく・さがみこ創り…… 20
11 『小原の奴』継承人材育成事業…… 22
12 相模ダムカレー・ダムプレート事業…… 24
藤野地区
13 葛原地域環境整備事業…… 26
14 しのばら園芸市…… 28
15 赤沢環境整備プロジェクト…… 30
16 雑穀普及活動…… 32
17 みんなの教室事業…… 34
18 リレートークの会…… 36
19 藤野定期便…… 38
20 風の森学び舎～風と水の流れる森づくり…… 40
21 子ども達の居場所と地域交流の場づくり…… 42
22 地産ガチャ…… 44
23 フリーペーパー「里山ヘッズ」の発行…… 46

地域活性化事業交付金とは

■地域活性化事業交付金とは、より多くの市民の参加と協働による地域の活性化を目指し、本市のまちづくりを進めてきた２２の地区で展開される市民による自主的な事業に対して交付される交付金です。

■対象事業

・地域の防災･防犯に関する事業
・地域福祉の増進に関する事業
・地域の保健･健康づくりの増進に関する事業
・産業や観光の振興に関する事業
・環境の保護･保全に関する事業
・青少年の健全育成に関する事業
・地域の文化･伝統の振興に関する事業
・生涯学習に関する事業
・地域及び地域活動の情報発信及び広報に関する事業
・区が推進する重点事業
・その他地域のコミュニティづくりを目的とし、区長が特に認める事業

■優先的な交付対象事業

・自治会への加入促進
・地域における公共的な活動の担い手育成
・公共的な活動への参加者増加
・地域の公共的な活動団体間の連携強化
・まちづくり会議が提示した地域課題の解決

■交付対象とならない事業

・政治活動、宗教活動又は営利活動を目的とする事業
・交付申請を行う年度において、相模原市が実施する他の補助制度等の対象となる事業
・政策提案又は講座等の開催を主たる目的とする事業
・調査、研究を主たる目的とする事業。ただし、地域の活性化に資する事業に繋がる計画があるものを除く。
・第三者への事業促進を求める事業
・前各号に掲げるもののほか、区長が適当でないと認める事業

■交付金の申請者は、原則として交付金の趣旨に合致する事業を行う５人以上の構成員で組織される団体とします。申請にあたっては、事業を実施する地区の各まちづくりセンターへ事前にご相談ください。

■当該年度の事業実施期間は、４月１日から翌年３月末までとします。また、同一の事業に継続して交付する場合については、３年を限度とします。

■交付金は、次の経費を交付対象とし、その交付率は１０分の１０以内とします。

・事業に要する消耗品費、郵便代等の通信費、印刷製本費等
・事業を行う上で必要な食糧費（交付対象者の構成員に対するものを除く。）、備品購入費、施設使用料、備品借上料等
・事業を行う上で必要な施設等の光熱水費等
・事業を行う上で必要な委託費等
・イベント等の開催時に掛ける保険料、警備費等
・講演会等の講師に対する報償費
・研修会の旅費等、研修に要する経費（交付対象者の構成員個人の資質向上に対するものを除く。）
・その他事業遂行に必要な経費であって区長が必要と認めるもの

※備品（物品等で１件１万円以上の財産）にかかる経費の交付率は、対象経費の３分の２以内となります。

おもちゃの広場による多世代交流

橋本地区

団体名：おもちゃの広場はしもと

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

核家族化が常態化して、久しく子どもたちは、保育園・幼稚園・学校・塾・習い事という同年齢の環境に、親世代は職場が中心で、年を取ってからはデイサービス・老人ホームというやはり同年齢の環境におり、気が付けば同じ世代の人同士の付き合いですら減り、ややもするとより閉鎖的になっていないかと気になっていた。

そこで、「おもちゃコンサルタント」という資格を活かして、選りすぐったおもちゃやボードゲームを多世代で遊んでもらい、交流の場とする「おもちゃの広場はしもと」を始めた。

２　事業の目的

地域の多世代交流を盛んにすることで、子どもたちはお爺ちゃん、お婆ちゃんから日本の文化を受け継ぎ、シニアをいたわる福祉の心を培い、シニア世代は子どもたちの活気と純粋な心に癒され、いいことづくめに聞こえる多世代交流であるが、なぜか難しい。

その実現には、世代を超えて楽しんで遊んでもらう環境づくりが必要で、選りすぐりのおもちゃやボードゲームはどんな世代も一緒に遊び、楽しめることを発信することを目的としている。

３　事業の実績

マンションの集会室（使用可能期間）と自治会館で、それぞれ月１回「おもちゃの広場はしもと」を開催した。

また、コミュニティカフェ「より道」に５回出張し、ボードゲームを体験してもらった。今年度は、スタッフ２名で広場開催１４回延べ１５０人の参加者（一日平均約１０名）があった。広場開始当初は、幼児中心であったが、徐々に小学生、シニアの参加者が増えてきた。

４　事業の成果

おもちゃを通して多世代交流を双方向で楽しんでもらい、小学生とシニアの交流では五重塔等の模型造りの貴重な体験ができ、幼児は広い会場で良質なおもちゃを楽しみ、小学生くらいからは大人とボードゲームを本音で楽しみ、初めて会った人とも世代を超えて仲良くなれた。シニアは子供の元気を、子供はシニアの懐の深さを感じられたと思う。コミュニティカフェ「より道」でボードゲームをシニアの方に楽しんでもらえたことは、貴重な経験となった。

５　事業実施団体による自己評価

「おもちゃの広場はしもと」の良さをアピールすることが不十分なのが残念であるが、来ていただいた方からは好評なので、地域の方に周知する努力を続けていきたいと思う。思った以上に、シニアとボードゲームの相性の良さを実感した。カプラ積木もスマホのゲームに偏りがちな子どもたちに新鮮な遊びを提供できたと自負している。幼児親子には一般的なおもちゃ屋で出会えない、選りすぐったおもちゃの良さをお伝えでき、個人では借りられない大型絵本の読み聞かせは、幼児に絵本との出会いのきっかけを作った。これからも近所に楽しい遊び場があると知っていただいて、遊びにきてほしい。

６　今後の展望

近所に楽しい遊び場「おもちゃの広場はしもと」があることを皆様に知ってもらうよう広報活動を工夫したいと思う。多世代での遊びが心と脳をリラックスさせて嬉しさを感じることが、優しさを生み、その優しさが循環すると思う。現在は、子ども達とシニア世代の出会いの場であることを知って頂くために無料で行っているが、今後は、子どものための工作、シニアの絵手紙等のワークショップを行えるようにしたいと思っている。

近所付き合いが減っている今だからこそ、助け合う優しさを地域で作っていきたい。そこに行政の支援があったら嬉しい。

コミュニティカフェ（地域食堂）　橋本地区

団体名：かまどカフェ

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

相原地区は、高齢者支援センターや高齢者の団体を中心にサロンやゲートボール等の活動も活発であるものの、高齢者の外出の機会が減り、地域の人間関係の希薄化が浮き彫りとなっていた。また、「高齢者が集まって食事をするところが近くにない」「お喋りする場所がない」という声も届いていた。そんな中、小規模多機能ホーム「ななかまど」のスタッフ・ＯＢを中心に「食を通じた地域の交流の場を作りたい」と声が上がり、高齢者支援センター、地区社会福祉協議会の方々に協力を得ながら活動を開始した。

２　事業の目的

毎月第２木曜日１１：３０～１５：００、来訪して下さる方に有料で昼食とおやつを提供する。価格は材料費程度を考えている。当初、紹介していただく予定だった建物が使えなくなり、「ななかまど」の厨房を借りて調理し、駐車場で食事を提供する「あおぞら食堂」。食事をきっかけに、地域の方々が交流できる場所作り、仲間作り、「かまどカフェに行けば誰かに会える」という外出のきっかけ作りが目的である。

３　事業の実績

５月から毎月第２木曜日に休むことなく１１回開催することが出来た。当初、約２０食の提供を目標にしていたが、地域の方々が沢山来訪してくださり、現在は３０食程を用意するようにしている。高齢者の参加が８割、子ども達の参加が１割。リピーターが約９割である。高齢者支援センターで広報していただいたことや、チラシを配布するなどして、口コミで広がったようだ。購入したテントや机、椅子を活用して、広々と開催出来た。

スタッフは、「ななかまど」職員やＯＢを中心に地域の方や学生も参加し、毎回７～８人が参加、お客様は延べ３４６名の参加となった。地域の集いの場として定着してきたと感じている。

また、かまどカフェと同時に折り紙教室や「ななかまど」に協力を得て、「手作り市」も開催し、地域の方に楽しんでいただいた。

４　事業の成果

コロナ禍でのスタートであったが、屋外での食事ということで、逆に皆さんが参加しやすかったのかもしれない。一ヶ月に一度、一人暮らしの方や高齢者の集いの場所として地域に根付いてきたと実感している。開催日には、翌月のメニューを書いたチラシを用意しており、翌月を楽しみにしているというお声もいただく。また、顔なじみになったお客様がお休みされていたことがあり、高齢者支援センターと情報共有をした。病気や怪我をしている方、認知症の方もおり、関係機関と繋がっていることの大切さも実感した。

５　事業実施団体による自己評価

「食を通じた地域の集いの場」として、定着、継続することが出来た。時間によっては多くのお客様が来られることで、スムーズな運営が難しかったことは、反省点である。コロナ対策で消毒の徹底、お持ち帰りの対応ができたことは評価できると思う。

屋外開催のための暑さ・寒さ対策の難しさを感じており、これからも多方面から配慮をしながら開催していきたいと考えている。

６　今後の展望

参加者はもちろん、地域包括支援センターや地区社会福祉協議会、自治会などの皆さんから意見を伺い、地域の方々が望む、地域に開かれた集いの場所になるよう活動していきたいと考えている。

現在、「夜も開催してほしい」「美味しいコーヒーをゆっくりと飲みたい」等の要望をいただいており、夜間や喫茶のみの開催も検討中である。

また、屋外での開催のため、毎回天気の心配をしながらの開催。テントのお陰で多少の雨なら大丈夫であるが、近くで空き家や店舗、施設があれば利用を考えたいと望んでいる。

散歩普及のためのオレンジバンダナ配布事業

大沢地区

団体名：歩いてつながる大沢さんぽの会

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

大沢地区地域ケア会議地域づくり部会で、「坂や階段が多い」、「高齢者は閉じこもり傾向の人が多い」、「高齢者の自主活動グループの減少」、「住民交流の場の減少」という地域課題が明らかになった。

フレイル予防への関心が高まっていることから、このことへの対策として、散歩・ウォーキングを普及させるため、本会を組織し地域への散歩の普及を開始した。

２　事業の目的

地区の高齢者への散歩・ウォーキングを通じた「フレイル予防」の取組みを定着させる。
また、共通の目印を身につけることで地域の見守り活動に寄与する。

３　事業の実績

今年度はバンダナと普及啓発チラシを作成した。
次年度以降、地域住民を対象に普及啓発事業を実施する予定。

４　事業の成果

４月に「大沢さくらまつり」、「上九沢団地まつり」など複数のイベントでの配布が決定している。

民生委員や地域の団体所属の方々は、既にバンダナを付けて活動をしてもらえており、地域の健康増進への興味関心を高める効果が出ているものと考える。

５　事業実施団体による自己評価

コロナ禍があけ、人々の気持ちは外に向いていると思われがちだが、実際には体力や気力の衰えにより、外出は最低限に抑えている高齢者が多いのが実情である。

地域の賑わいも少なくなっている中で、今後の活動において少しでも地域の輪を取り戻していくことができればと考えている。

６　今後の展望

令和６年４月７日実施のおおさわ桜まつり、令和６年１０月実施予定の大沢健康まつり等にて、チラシ・バンダナを配布する。

大沢地区の地域包括支援センター、社会福祉協議会、公民館、民生委員・児童委員協議会、自治会連合会、老人クラブ連合会の他、百歳体操・ラジオ体操の協議会などとも連携を図り、本事業の普及を進める。

自然いっぱい♡歩いてつながる大沢さんぽ

大沢地域包括支援センターでは現在、地域のかた一人一人が、老若男女問わず、簡単に始められる「フレイル※予防対策」として、「散歩・ウォーキングの習慣化」に向けた取り組みを行っています。センターでは、地域の高齢者の方を対象に、講座や散歩企画を行っています。その中で、「みんなで取り組む」きっかけにしてもらう一つとして「オリジナルバンダナ」を作成しました。

このバンダナは現在、数が限られていることもあって、包括支援センターの高齢者向け教室の参加者などを対象にお配りしていますが、皆様の反応を踏まえて、来年度以降の配布を検討します。

バンダナをもらうには・・・（一例です）
① 地域主催のウォーキングイベントと前後の介護予防教室・勉強会に参加された方
② 包括主催の介護予防教室（総合コース）に参加された方（５年１２月頃募集予定）
③ 包括主催の介護予防教室（指定された講座）に参加された方（随時開催予定）
④ 地域の百歳体操などに参加されている方（どこかでセンターがお邪魔します）

②・③は自治会の回覧板などで募集をしますので、見逃さないようにしてください♪

※「フレイル」…健康な状態と「介護が必要な状態」の中間の状態を「フレイル」と呼んでいます。この時の取り組み方で「健康」に戻ることも出来ますが、取り組まなければ「介護が必要な状態」になってしまいます…

皆さんの参加をお待ちしています！

バンダナ、もらったはいいけどどうやって身につけようと思っている方、いませんか？もちろん、自由に身に着けていただければよいのですがいくつかご案内したいと思います。一番多いのは首に巻く！ですかね？次に頭に巻く、バックにつける等。他にもマスク代わりとして使ったり、汗拭き代わりに、ペットボトルを入れてふろしき代わりにして持ち歩いても良いかもしれません。ネットから使い方を拝借するとスマホ拭き、食器拭き、お弁当包み等（笑）もありました。万能なバンダナ、１つ持っておいて損はありませんよ。

しろやま☆おせっかい　　城山地区

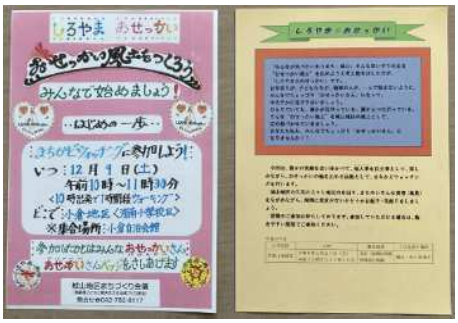
団体名：城山地区まちづくり会議 高齢者とともに築き支える地域づくり部会

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

城山地区では、高齢者サロンや健康体操など、地域における交流活動が活発に展開されている。しかしながら、生活様式や個人の価値観の多様化などにより、自治会、シニアクラブ、その他さまざまな交流活動の場など地域社会との直接的な関わりを持たない高齢者も増加していると感じている。そうした中、地域社会との積極的な関わりを望まない人に対しては、誰かと繋がっているという安心感が得られるようなゆるやかな見守りの仕組みが必要であると感じ、「みんなで気づかいあうまち・城山」そんな“おせっかい風土”を広めようと考えた。

２　事業の目的

城山地区内の住民が少しだけおせっかいになり、周囲への直接的な声かけのほか、目配せや気配りによる間接的な見守りの意識を醸成し、地域全体に浸透させ、誰も取り残されない、取り残さない”しろやま☆SDGs”の街を形成するため、今回は城山地区の住民の方々と実際に地区内を回り、まちのいろいろな表情（風景）をながめながら、周囲への声かけと併せて、声かけによらない目配せ・気配りによる異変の有無の確認などを通じて“おせっかい風土”をさらに広め根づかせる。



３　事業の実績

令和２年度に、異変に気付くためのポイントを示したチラシ「しろやま☆おせっかい」を民生委員児童委員協議会の協力により城山地区内各戸に配布した。今年度は“おせっかい風土”をさらに広め根づかせるため、城山地区の住民（在学・在勤を含む）から参加者を募り、実際に地区内を回って、まちのいろいろな表情（風景）をながめながら、周囲への何気ない声かけと併せて、声かけによらない目配せや気配りを行う「まちかどウォッチング」を実施し、参加者への「おせっかいバッチ」の配布を通じて取組の連帯意識の向上を図った。

◆部会全５回(出席者：①10 名②8 名③9 名④9 名⑤8 名)
◆7 月 22 日　川尻小学校区（原宿地区）まちかどウォッチング（出席者：20 名）
◆9 月 23 日　広田小学校区（町屋地区）まちかどウォッチング（出席者：15 名）
◆12 月 9 日　湘南小学校区（小倉地区）まちかどウォッチング（出席者：21 名）
◆1 月 27 日　広陵小学校区（城山・谷ヶ原地区）まちかどウォッチング（出席者：32 名）

４　事業の成果

城山地区内の様々な地区でまちかどウォッチングを実施し、まちづくり会議（部会）で検討してきた、地域を知り人と繋がることで目配りや気配りを行う、ゆるやかな見守りの気風のきっかけとなった。

また、まちづくり会議委員や協力者によるエリア内全戸チラシ配布を行ったことにより、まちかどウォッチングに参加しなかった人に対しても、広く啓発をすることができた。参加者同士のコミュニケーションも行われ、地域の繋がりの一助となった。

５　事業実施団体による自己評価

事業を実施した４地区各々に自治会、民生委員等、協力参加者が力となり呼びかけ、コミュニケーションの繋ぎ役としての積極的な行動が、今後事業を進める地域力となることを感じた。

まちのいろいろな表情（風景）をながめながら、周囲への声かけと併せて、目配り・気配りによる異変の有無の確認などを通じて“おせっかい風土”への種蒔きができたことを実感し、これからさらに根づき広まっていくと確信している。

６　今後の展望

今後は、地区内の各種団体との連携を強化し、子どもたちも理解して興味と関心を持ってもらえるような企画を考え、城山地区におせっかい風土がさらに広く根づくような取組を検討していきたい。

また、個々の気付きを活かすため、横の繋がりがスムーズにいく仕組みを作り、周知したい。

城山湖ヒルクライムアタック雌龍籠山ステージ　城山地区

団体名：城山湖ヒルクライム実行委員会

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

・城山地区が東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会自転車ロードレース競技のコースとなったことから、城山地区の地域資源を活用した事業を実施することで城山地区の魅力発信、城山地区のシビックプライドの醸成に繋げていく必要がある。

・大会後のレガシーとして、ツアー・オブ・ジャパン相模原ステージと共にシティプロモーションの推進、シビックプライドの醸成等に繋げる。

・自転車（ロードレース）における名所として、城山地区の魅力発信と知名度の向上を図る。

２　事業の目的

・参加選手が練習に訪れたりするため、通年の訪問者を増やし、城山地区の魅力発信と知名度の向上に繋げる。

・東京 2020 オリンピック・パラリンピック競技大会自転車ロードレース競技の大会後のレガシーとして、自転車ロードレース競技の普及及び城山地区の魅力発信と知名度の向上を図る。

・市民が主体となって「城山地区のために!!」をスローガンとして地域内住民の連携強化を図る。

・スタッフも楽しめるイベントとし、地域連携、事業参加の楽しさや重要性を市民に体感してもらう。

３　事業の実績

◆実行委員会全７回(出席者：①12 名②12 名③12 名④11 名⑤50 名⑥10 名⑦9 名)

◆ボランティアスタッフ説明会（出席者：11 名）

◆前日準備（参加者 25 名）

◆大会当日（参加選手：105 名　ボランティアスタッフ 77 名）

４　事業の成果

男性 107 名 女性 11 名（神奈川県 74 名 近郊県 44 名）合計 118 名の参加申込（当日出走は 105 名）があり、地域団体（自治会、観光協会、商工会等）や個人ボランティアの協力により、地域一体となった事業として開催することができた。また、第４回を迎えることにより参加リピーターも約 50%おり、参加者からの評価も高く自転車ロードレースとしての認

知が高まり、城山地区の魅力発信の良い機会となった。

本大会を通じて、自転車競技をＰＲし、シティプロモーションの推進やシビックプライドの醸成に繋げられたものと考えている。

５　事業実施団体による自己評価

・ボランティア 77 名（自治会、観光協会、商工会等、個人）が参加することで地域一体となった事業運営を行うことができた。

・大会の状況をリアルタイムで会場にアナウンスすることで、観戦者と選手が一体となって盛り上げることができた。

・麓（城山総合事務所）から山頂（城山発電所）まで観客送迎用無料マイクロバスを運行し、観戦しやすい環境を整えた。

・ドクターや救急救命士を配置し、緊急時に対応できる医療体制をとり、万が一の場合に備え、参加者やボランティアの安心・安全を図ることができた。

・城山湖周辺を会場とすることで、自然環境や観光資源をはじめとする魅力を発信することができた。

６　今後の展望

・参加者の増加、協賛企業等の支援、効率的運営による費用削減等を推進し、補助金を活用しない効果的な開催を進めていきたい。

・本ロードレースをきっかけにロードバイクで継続的に訪れるような自転車ツーリズムの普及に繋げたい。

みんなの津久井湖夏祭り　城山地区

団体名：みんなの津久井湖夏祭り実行委員会

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

①津久井湖城山公園（水の苑地）は城山地区の中で代表する風光明媚な観光スポットであるが、地区外の方の知名度が低く、津久井湖城山公園（花の苑地）に比べ観光施設が無いことや、イベントも少ないことから観光客が少ない。このことから水の苑地を活用したイベントを実施することにより、地域の魅力を発信し、知名度の向上を図り、地域の活性化に繋げていく。

②城山地区では各地域において様々なイベントが開催されているが、多くの地域においてスタッフの高齢化が進み、イベントの縮小や廃止がおきていることから、若手のリーダーや地域における公共的な活動の担い手の育成が必要である。

③昨年度、第１回みんなの津久井湖夏祭りを実施したが、計画の３倍以上の来場者があり、駐車場と警備体制の不足から公共交通機関の渋滞を招いてしまった。この反省から、駐車場の確保や交通警備員の増強を図り、安全かつスムーズな交通処理を行い、参加者に安心して楽しんでいただけるようなイベントに造成する必要がある。

２　事業の目的

①第１回の時に遠方からのサイクリストで、イベントに参加された方の中に「城山にはこんな素晴らしい所が有るんだ、仲間にも紹介しよう」と言う方がおられた。イベントを通じて津久井湖（水の苑地）、そして広く城山地区の魅力と伝統文化を知っていただく。

②このイベントは若者が中心になって、広くボランティアを募り市民参加型のイベントを目的としている。（実行委員長が女性で 30 代、副実行委員長は 20 代男性等、多くの実行委員は若手となっている。）また大学生や高校生のボランティアも多い。本イベントを通じて若手スタッフが育ち、地域における公共的な活動の担い手となって活動することを目指す。

③前回はキッチンカ―による出店が中心であったが、今回はテントを用意し地元の飲食店を中心に出店していただき、地域の経済活動の活性化の一助となることを目指す。

３　事業の実績

◆実行委員会全９回(出席者：①25 名②23 名③25 名④22 名⑤23 名⑥22 名⑦24 名⑧20 名⑨16 名)

◆7 月 28 日　出店者・ボランティアスタッフ説明会（出席者：40 名）

◆8 月 11 日　イベント当日（来場者数：8,500 名）

◆8 月 12 日　イベント翌日（みんなでゴミ拾い）（参加者：51 名）

４　事業の成果

①昨年度の「第 1 回みんなの津久井湖夏祭り」の来場者 5,000 人に対し、今回は 8,500 人と大幅に増加した。また、知名度が上がってきたことにより城山地区以外の来場者の増加が目立った。

②昨年度と比べ実行委員が 20 名から 30 名に、ボランティア数も 50 名から 95 名と大幅に増え、その中心が 20～30 代でイベント開催の大きな力となった。

③昨年度の「第 1 回みんなの津久井湖夏祭り」では予想以上の入場者のため交通渋滞を起こし迷惑をかけてしまい、その反省として「イベントの安全と交通渋滞回避」を目標にかかげ、警備員の増員や危険箇所へのボランティアの配置、そして駐車場の確保や川尻小学校と広陵小学校から相模原城山高校前までの定期シャトルバスを運行することによって無事故・無渋滞を実現できた。

④イベントを持続可能なものとするために広く事業者や個人の協賛を募り、昨年度の 21 社(人)から 97 社(人)と大幅に増加し、計画どおり花火も打ち上げることが出来た。

５　事業実施団体による自己評価

出店数やイベント数の倍増、花火の打ち上げもあり前回をはるかに超える 8,500 人の来場が有り、会場は終始盛り上がりを見せた。また前回の最重要課題であった「安全の確保と渋滞の回避」については無事故・無渋滞を達成できた。また、実行委員やボランティアスタッフの充実により新たな企画として「ランタン・キャンドル night」やビンゴゲーム、キッズダンス等により楽しんでいただけたと思われる。知名度が上がってきたことにより協賛していただいた会社(人)が大幅に増え、将来本事業が自走できる足掛かりを作ることが出来た。

６　今後の展望

「みんなの津久井湖夏祭り」というネーミングにもあるように本イベントが沢山の人の手で計画され、実施される幅広い年齢層による手づくりの地域に根差したイベントとして成長してきている。今年度は 70 名のボランティアの学生と 25 名の地域ボランティアの協力があった。地域住民・企業に加え、高校生や中学生を巻き込んだイベントとなるよう来年度は進めていく計画である。城山地区の歴史・文化そして豊かな自然を紹介し、それを生かした特徴のあるイベントとなることを引き続き目指して行きたい。

米・大豆等の栽培で持続するまちづくりを目指す事業　津久井地区

団体名：「農園会」

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

上青根集落は、生物多様性に富む自然豊かな里山にある。2021 年Ｇ７サミットで合意された“30by30”の目標エリアの認定に値する場所である。だが、住民の高齢化と人口減少に伴い、人間の活動領域と野生動物の生息エリアとの境界線が曖昧となり、鳥獣被害が増加してきた。

これらの因果関係を改善し、活力ある地域を再生するには、地域外の人々と手を携えて協働事業を展開することである。誰でも親しめる農作業を通じて「交流（関係）人口」を増やすことにより、地域の活性化・持続化を図る。

２　事業の目的

・住民有志の力で耕作放棄地と野生動物による農作物への被害を防ぎ、里山の自然環境を保全。
・会員のほか、一般有志との協働、他の団体との連携により、相模原産の酒米や、津久井在来大豆を栽培し、酒米は地産の酒として地元の酒造会社に醸造を依頼したり、大豆は企画したイベントで参加者に味噌を作ってもらったりして、関係人口を増やし、地域の広報・振興に努める。
・以上の事業を通して、会員（住民）・一般参加者・団体が協力し合うことで人流を盛んにし、地域全体に活気をもたらす。

３　事業の実績

コロナ禍が下火になり、様々な協力団体からの支援を受け、参加者の数（60～70 人）も安定してきた。協働の形が整い、事業は軌道に乗ってきた。

酒米の収穫もイノシシの食害を受けた昨年とは異なり、315kg と防護柵の効果もあり、昨年度(34kg)と比較して大幅な増収となった。

田植えの様子

４　事業の成果

酒米作りの会による脱穀の様子

「協働」という点では、運営上、支援団体と農園会との連携団体（「酒米作りの会」）との連携が円滑に進み、事業の重たる「田植え・草刈り・稲刈り等」では、参加者と主催者側との“汗と笑顔”の「交流」は勿論、住民の協力（水道の使用・資材の提供）もあり、地域の人口減少に比して関係人口は着実に増加した。

５　事業実施団体による自己評価

事業主体者、これを支える支援団体、そして肝腎な参加者、さらに地元協力者らの協働・交流によって、地域に活気がうまれている。休耕田で農作物を育てる地域外の個人や団体が上青根で急増した。主に当事業に参加していただいている方々であり、とても有り難い限りである。

６　今後の展望

当会の活動拠点は過疎地にあるものの、相模原産初の日本酒の誕生によって旧津久井は衆目のとまる所となった。

また、地元では当会を初め地域振興を目的とし、既に様々な団体が活動している一方で、地区外から個人や団体の方々が青根に根を下ろして積極的に活動がなされている。

以上の状況を踏まえ、今後とも地区内外の団体や有志と連携・協働し、さらに人的交流を盛んにしていく。そして、事業に持続性を持たせるため、単に作物の栽培にとどまらず、収穫物を販売し収益の一部を事業の運転資金に充てるなどにより、交付金に頼らない自立への第一歩としたい。

鳥害獣の食害防止・駆除により農林業の促進を図る

津久井地区

団体名：長竹地区鳥害獣自主防衛隊

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

近年、鳥や獣の食害被害が多発し耕作者を困らせ、生産意欲を減少させている。私営の活動によって被害を減らし、緑豊かな農林業を発展させる。

２　事業の目的

長竹地区内の田畑の農作物を食害から防止するための研究及び実施。また、鳥害獣を捕獲し利活用する。

３　事業の実績

・農作物の被害を聞き取り調査
・くくり罠等の設置
・毎朝の見回り
・シカ捕獲、解体、試食
・タヌキ、ハクビシン、アライグマ捕獲及び処理

４　事業の成果

・シカ捕獲により、農作物の被害減少が図られた。
・会員が山に入ることで鳥害獣の行動が規制された。
・地区住民の鳥害獣食害防止の意欲向上が図られた。
・シカ肉の試食により、ジビエ料理等の害獣の利用促進への意識が高まった。
・会員同士の交流が深まり、自治意識が高まった。

５　事業実施団体による自己評価

当会の活動・行動成果により、住民自らの鳥獣害の自主防衛に希望が生じた。

６　今後の展望

・自己啓発、団体の意識向上のため、講習会等を行う。
・ジビエ等の活用への研究を行う。
・串川地域の他の団体と協力し、被害防止の輪を広げていく。

自然災害伝承事業　津久井地区

団体名：自然災害伝承碑「地震峠」を守る会

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

令和３年１２月２１日に「自然災害伝承碑」として登録された馬石地区の「地震峠」は、大正１２（１９２３）年９月１日に発生した関東大震災により、死者１６名、埋没棟数９戸の被害を受けた場所であり、当該地には、１６名の慰霊碑のほか、被災した一家の慰霊碑と地蔵尊が並んでいる。

過去の大規模な自然災害箇所であり、令和４年度から始めた本事業が拡がりや深まりをみせ、さらに将来を担う若い世代に継承していく重要性がある。

２　事業の目的

過去の大規模な自然災害に学び防災･減災を目的として自助、共助、公助の意識を高める。

３　事業の実績

令和５年３月、総務省行政評価局の目に留まり、総務省の職員より「若い世代にどのように継承していくかが課題」とアドバイスを受け、地震峠の漫画の作成を地元の津久井高等学校漫画研究部に依頼した。卒業生を含め在校生で現地に赴いて遺族の話を聞き、同世代を主人公にした漫画が完成した。この活動が各メディアから注目され、各新聞社、ＮＨＫテレビ、テレビ神奈川等で放送された。また、九都県市共同訓練、ぼうさいこくたい 2023 から依頼があり、漫画の展示を行った。さらに、地震峠の歌も制作し、９月３日に鳥屋地域センターにて防災の日を兼ねて発表を行った。

地震峠の漫画と歌を披露した時の様子

４　事業の成果

関東大震災から１００年の節目の年に、若者の漫画制作を通して高校生、大学生自らが地震峠を発信・継承していくという機運が高まった。ＮＨＫの全国放送を通し、広く周知することができ、現在、県内外から地震峠に来訪があり、鳥屋地域の伝承活動を応援したいとの声もあがっている。

５　事業実施団体による自己評価

・地震峠の漫画を通して若年層への継承に繋がった。
・鳥屋学園の７年生が、防災などの学びを自主的に実施することに寄与した。
・地域住民が、地震峠の歌の合唱に加わった。
・この活動をマスメディアが多く取り上げたことで、全国発信に大きな成果を得た。

６　今後の展望

関東大震災から１００年目の節目をスタートとし、継続した活動を進めるために自然災害伝承碑「地震峠」を守る会を中心に次年度も伝承活動を継承していく。

わくわく・さがみこ創り

相模湖地区

団体名：相模湖地域連絡会

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

相模湖地域では現在、人口減少が問題となっている。

この問題を解決するために地域全体で活性化を行い、人口流失を抑止し、人口増化へ繋げていく。

その為には、地域住民との対話を行い、将来の生活・財産の不安・地域の発展の不安を活動を通して払拭していきたいと考えている。

２　事業の目的

本会が魅力あるまちづくりを目指す活動を行い、地域の多くの個人・団体と活動を共にすることで、地域住民が参加意識を高めて大きな人の繋がりを形成し、住みよい町・楽しみのある町としていくことを目指していく。

３　事業の実績

（１）　ポスター部会

・地域会レター等を作成

（２）イベント部会

・相模湖ハロウィン(10/29)主催

・相模湖夏祭り（8/19）、小原宿本陣祭（11/3）、八王子いちょう祭り（11/18, 19）、商工会女性部 40 周年記念イベント（1/11）、相模湖湖畔さくら祭り（3/23）への参加

（３）桜道構想部会

・与瀬神社遊歩道斜面の下刈り（10/15）

・与瀬神社遊歩道斜面の下刈り（2/18）

・地権者の同意を得て与瀬神社遊歩道斜面に桜の苗木 9 本を植樹（3/24）

（４）その他

・桂北小学校特別授業（3/6）

・小原宿本陣お雛様設置(2/4)※博物館主催　春のお出かけスタンプラリーに併せて設置

４　事業の成果

今年度は相模湖地区内での当会の知名度が増し、より積極的に地域活性化に参加することと、既存の団体との連携を深めていくことができた。活動を実施するうえでは、多くの団体・人からの理解を得ることでスムーズな活動が可能になるとともに、互いの情報や活動の共有をすることでさらに相模湖地区の活性化に貢献できた。

５　事業実施団体による自己評価

年々、団体の知名度も増し、他団体や地域の方々からの保護すべき地域文化・伝統活動への協力依頼をいただくことが増え、また、本会の活動への協力を得られるようになったことは、活動を継続していくことの意義を強く感じられた。

地域会レターを発行して、地域の皆様に活動を認識していただき、他の団体からのインタビューや桂北小から記念授業の依頼をいただいたことは、当会の活動についての前向きな評価であると捉え、今後も地域の進行とより良い相模湖を目指して活動を行っていく。

６　今後の展望

桜植樹や、地域の文化事業・催しを通じ、高齢者への外出支援等の活動を継続し、地域内外へ本会の認知をいただくことで、人と人の繋がりをさらに強化し、多くの団体や個人との繋がりを更に強化することで、町全体の活性化・発展への一途としていく。

『小原の奴』継承人材育成事業

相模湖地区

団体名：甲州街道小原宿本陣奴会

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

小原地区では平成 5 年より地域活性化を目指して「甲州街道小原宿本陣祭」を開催している。青年層を中心に大名行列の「奴（やっこ）」の担い手を地域から輩出することによって、将来の地域の担い手を育成してきたが、若年層への浸透が不十分である。そのため奴の後継者及び地域の担い手の不足が顕著になってきたと感じている。

昨年交付金を利用して今までよりも積極的に活動・宣伝をしたため会員が 4 名増えたが、我々が望む青年層より上の者だった。いかに若い人を取り込んでいくかが課題である。

２　事業の目的

◆『小原の奴（の舞）』の継承活動を通して、地域の活性化を促し、新たな担い手を輩出する。

◆地域教育機関と連携し、『小原の奴（の舞）』を次世代に継承する。

◆小原・相模湖地区の魅力を内外部へ発信するため、地域での街頭演舞や他地区へのイベント出演を行う。

◆他団体のコラボレーションにより交流を実現し、相互地域の活性化を目指す。

３　事業の実績

・出前授業として小原本陣にて『小原本陣の歴史』『大名行列の意義』『奴の舞体験』を北相中学校の生徒を対象に講座を開催することができた。（R5. 10. 31）

・市民若葉祭り、小原宿本陣祭、八王子いちょう祭り等のイベントに参加し、『奴の舞』を披露するとともに相模原市緑区、小原宿本陣の PR 活動を行った。

４　事業の成果

1. 北相中学校生徒への出前授業実施後には、生徒の皆さんからのアンケートで、「地域のイベントである本陣祭が楽しみになった」や「伝統を受け継ぐことの大切さを感じた」等の感想をいただくことができた。

2. 八王子いちょう祭りでは、多くの来場者の前で演舞を披露し、市外の方にも奴会や本陣祭の宣伝をすることができた。

５　事業実施団体による自己評価

中学生への出前授業を通して地域への愛着を高め「小原の奴」に関心を持ってもらう機会をつくることができて良かったと思う。地域外への発信という観点では、今後も地区外へのイベント参加は有効な手段と考えるため継続性をもって取り組んでいきたい。

６　今後の展望

・引き続き、各種メディアを通じて活動の様子や奴会の思いを発信していきたい。
（過年度は TBS テレビ・日本放送、タウンページで奴会のことを取り上げてもらったり、新聞の折込みで活動報告をしたりするなど周知活動に努めた。）
・新聞折込みでの活動報告は年 2 回を予定。
・奴会で保管している衣装や道具類を近隣小・中学校に社会科教材などとして貸し出しをする。（過年度は津久井中央小学校に貸し出した。）

相模ダムカレー・ダムプレート事業

相模湖地区

団体名： 相模ダム観光推進協議会

１ 事業実施の背景や地域の現状と課題

現在、地域の観光客は減少し活気が失われつつある、再び地域に活気を取り戻すため観光振興が地域の重要な課題となっている。

現在地域の主要な観光資源の一つである相模ダムは、リニューアル工事が行われており、観光資源としての価値がより一層高まっている。

この機会に乗じてダム観光に来た方により相模湖を PR する事業を立ち上げるものとした。

２ 事業の目的

相模ダム近隣を中心とした相模湖地域全体の飲食店、観光振興を目的としたもの。

最近相模湖内のさがみ湖 MORIMORI がテレビで盛んに PR をしているが、さがみ湖 MORIMORI の外にそうした観光客は流れてこない。そうした観光客やダム観光に来た観光客に向けたＰＲに取り組むことにより、観光客を増加させ地域の活性化を図る。

３ 事業の実績

・ダムカレースタンプラリー実施

・ダムカレー店舗周知

ダムカレーの店舗を相模湖観光協会 HP や SNS ぶらり相模湖で周知した。また、相模原市のシティプロモーション戦略課の協力を得て Yahoo ニュースに取り上げてもらうことで周知を行った。

４ 事業の成果

相模湖地域全体の飲食店、観光振興につながる事業を行うことができた。

令和６年度から開始される相模ダムの工事に併せる形で事業を行うことで、相模湖の神奈川の水がめとしての重要性を PR することができた。

５　事業実施団体による自己評価

観光客やダム観光に来た観光客に向けたＰＲに取り組むことにより、地域の活性化となった。

また、店舗からダムカレーを食べに来てくれて、集客につながったという話も伺っている。

地域の PR、商店の振興という両面で一定の成果につながったと考えている。

６　今後の展望

観光、商業の両面に資する事業であり、令和６年度から開始される相模ダムの工事に向けて、今後も相模湖の神奈川の水がめとしての重要性を PR していきたい。

葛原地域環境整備事業　藤野地区

団体名：葛原有志の会

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

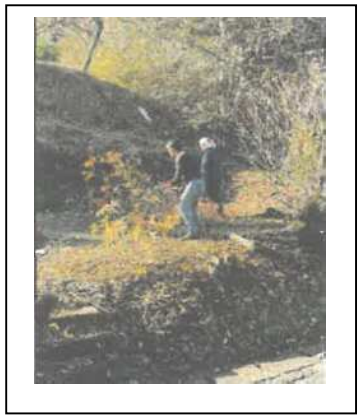
葛原地区には、藤野園芸ランドをはじめ、市道沿いに野外環境彫刻が点在する芸術の道、気軽にハイキングが楽しめる低い山々、神奈川の名木 100 選の正念寺のしだれ桜などがあり、四季を通して観光客に親しまれ、休日や行楽シーズンには、都心から約１時間圏内ということもあり、多くの観光客が訪れている。

このような中、葛原神社横にある休憩所が経年劣化により腐食が激しく、観光客の利用に適さない状況となっている。

２　事業の目的

傷んだ休憩所を改修することにより、観光客等が安全、安心して利用できる環境を作る。

また、休憩所を中心に周辺の環境整備を行い、この葛原地区にまた来ていただけるような空間を作る。



３　事業の実績

傷んだ休憩所の屋根を改修した。

道路に被っている木の伐採を行った。

４　事業の成果

今回、傷んだ休憩所を改修したことにより、観光客等が安全、安心して利用できるようになった。

また、休憩所周辺の環境整備も行っていることから、またこの葛原地域に遊びに来ていただける空間が整った。

５　事業実施団体による自己評価

傷んだ休憩所の屋根の改修ができて、観光客等この施設を利用する方々が気持ちよく利用できるようになり大変良かった。

６　今後の展望

相模原市、市観光協会等が当地区の観光スポットを PR していただいていることから、休憩所を改修することにより、観光客の来客、利便性の向上に繋がるとともに、地域の知名度を上げていきたい。

しのばら園芸市	藤野地区

団体名：しのばら園芸市実行委員会

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

・里山、中山間地として長く人手が入らなかったことによる森林の荒廃、耕作放棄地の増加
・上記に伴う獣害の増加
・地域に雇用がないための若者離れ、地域の高齢化、過疎化

２　事業の目的

・篠原地区の森林や耕作放棄地の環境を改善し、獣害の防止を行う。
・環境整備で出た材木等は地域の森林資源として商品開発し、販売イベントを開催することにより、観光客の呼び込み、観光資源・産業の創出などの地域活性化と次世代につながる地域、環境づくりを目的とする。

３　事業の実績

・12 月 2.3 日プレ園芸市開催
・5 月～3 月月 1～2 回会場整備
・月 1 回実行委員の定例ミーティング
・６月地域資源マップづくりロケハン
・しのばら園芸市ウェブページ制作、チラシ、ロゴ、各種デザイン
・獣害環境対策として会場整備にて耕作放棄地の開拓、やぶの切り開き

４　事業の成果

プレ園芸市は 2 日間にて入場者延べ 200 人ほど。

篠原地区地域住民との協働作業、藤野地域内のものづくり、飲食サービスを提供する人たちとの協働、連携、青山学院大学シビックマネージメントセンターとの協働、学生ボランティアの受け入れをすることができた。

５　事業実施団体による自己評価

概ね今年度予定していたことは実現達成できたかと思う。この春の本番に向けて更なる準備が必要。

６　今後の展望

・篠原地区内の活動団体である「篠原の里」などと連携するとともに、地域住民の賛同と合意を得ることにより、活動できる森林フィールドの増加、資源の提供、活動への参加者増加を図る。

・地域資源は、都市部等のフラワー、グリーン、クラフト系の事業者にＰＲし、地域活性化を図る。

赤沢環境整備プロジェクト

藤野地区

団体名：上野久保 杜を守る会

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

赤沢周辺の山や沢は、2019 年の台風 19 号の被害により、斜面の崩落、倒木などがあった。集落の市道、住宅がある側は整備されたが、山や沢はそのまま放置されている。金剛山山道へ続く遊歩道は登り下りが難しく、沢は崩落や倒木などで塞がり、山は土が乾燥して崩れやすく、笹は藪化して樹木が育ちにくく荒れた環境になっている。

このままではまた災害につながりかねないという懸念、登山や地域で散歩される方が山に再び安全に安心して入れるように遊歩道を整備したい、山や沢の状態を健全な状態に戻したいなどの声が地域で上がり、上野久保自治会の有志が中心となって今年１月から赤沢環境整備プロジェクトが始まった。林業や森の再生活動をする方に協力を仰ぎながら、地域住民による日々の手入れに加え、月一度作業日として、地域内外から、参加を募って作業を行っている。

２　事業の目的

赤沢、上野久保地域の森、山、沢が、安全で、健全な状態を取り戻すこと。

環境整備の活動を通じて、地域がつながり、住民自らの手で地域の自然、環境を守る動きに繋がっていくこと。

金剛山のハイキングコース赤沢口利用者の増加に繋がること。

このような活動が他の地域にも広がること。

３　事業の実績

年間で延べ 100 人余りの方が作業に参加。定期的に作業日を実施。（月に２回、６月のみ１回）

赤沢山の入り口付近の階段づくり、赤沢の倒木の撤去、沢、階段周辺、台風による崩落斜面を、生物多様性を考えた手法により安定させるためのしがら作り。笹により藪化した森の草刈りなど、多くの作業を行った。

４　事業の成果

作業予定、進捗状況を毎月地域各家庭に配布。関心がある方を森に案内。

森入り口付近の階段づくりをしたため登り降りしやすくなったため、金剛山方面からのハイカーの往来も増え、近隣の方が散歩に入られるようになった。また赤沢の沢内部の倒木などもきれいになり、崩れやすい斜面なども、作業の効果により斜面が安定、周辺に植物が生えやすい環境が広がった。

また全国から、藤野での地域活動を見学に来られる方のグループが赤沢を訪れ、（トランジション藤野 1day ツアー、大阪茨木市役場など 5 グループぐらい）このプロジェクトについて現地をご案内しながら説明することの活動に対し、賛同を得られた。

５　事業実施団体による自己評価

短期間の中で、コツコツと多くの作業を進めることができ、気持ちのいい森になったとの声も多くいただいた。まだまだやることは多くありますが、森の状態も良くなってきている。

地域の方々、外から作業に参加してくれる方々、応援してくれる方、同じような活動をされてる方々、市や県の担当の方々など、多くの繋がりが広がる活動にもなってきていて、正にこの活動を通じて様々な影響、広がりが生まれてきていると感じている。

６　今後の展望

継続して赤沢周辺の森の整備を続け、同時に周辺の集落にも活動の輪を広げる。
活動していく中で生まれるつながりから、他の地域でも活動の支援にいく。

雑穀普及活動

藤野地区

団体名：藤野あわ・きび・ひえの会

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

あわ、きび等の雑穀は、かつて地域の重要な食料として栽培されていたが、生産者の高齢化や食生活の変化等によりほとんど作られなくなってきている。また、それに伴い、地域にかつて存在した製粉、精穀等を行う施設が無くなり、栽培しても食べるまでの工程が困難になっている。一方、雑穀は栄養価の面で近年見直されてきており、地域の自給食材としても需要が高まっている。

２　事業の目的

雑穀の栽培、加工、利用記述を学び、継承することにより、雑穀栽培を広め、地域で自給自足できる食材としての価値を高めたい。

３　事業の実績

・雑穀栽培、精穀方法について実践し技術向上を図った。
・種まき、収穫、精穀の体験会を開催した。
・栽培普及を図るため栽培マニュアルを作成した。
・まちづくり会議での意見を踏まえて、地域の食堂での雑穀の利用を、現在調整中。

４　事業の成果

・精穀講習会等により会員の技術向上を図った。
・萬のメーリングリストにより栽培体験会の募集を行い、普及活動を行うことができた。
・これまでの経験を活かして、栽培マニュアルを作成し、今後の普及活動の材料を作ることができた。

５　事業実施団体による自己評価

・夏の高温、収穫期と雨の時期が重なる等、収量、品質に影響を及ぼす要因に対処法を考える必要がある。

・栽培体験会は、天候等の関係から、お知らせが直前になり、十分な募集を行えず、参加者も少なかった。開催方法を検討する必要がある。

・栽培マニュアル作成により、自分たちの栽培を見直すきっかけとなった。

・精穀機械の地域への提供は、進めることができず、今後の課題となった。

６　今後の展望

・地域内の雑穀栽培者を増やすための活動を引き続き行う。

・穀物の製粉、調整等を行える加工所を作る。

みんなの教室事業

藤野地区

団体名：オープンスペースよりどころ

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

・吉野地区において児童、学童の放課後を過ごせる施設や公園が徒歩圏内にない。
・学童保育は藤野小併設でスクールバスのない時間はお迎えが必要となる。
・近所に子どもが少ないため、友達と遊ぶために親が藤野小やお友達宅まで送迎しないと友達と遊べない環境である。共働きの場合、自力で移動できない学童は自宅で孤立し、遊びや学びの機会が減ってしまう。
・過去あった習い事も地域でなくなってしまっている→習い事にも送迎が必要で、母親は送迎に時間を費やしている。

・学校に紐づく行事や組織（育成会など）によりコミュニティが分断されている。
・子育て世代を中心に移住者が増えてきており、子どもを中心としたコミュニティ形成をするタイミングとして望ましい。

２　事業の目的

・学校以外の友達、仲間ができ、新しい学びや気づきを地域で得ていくことができる。
・子どもを見守るネットワークが地域ででき、参加者の親が協力することで助け合い、子育てをしやすい環境づくりに繋げる。
・地域の子育てにまつわる資源をつなぎ、活性化していく（人・自治会や学校などの組織・自然や文化など）。

３　事業の実績

当初週２回の活動を予定していたが、参加者のニーズ、管理者の工数を鑑みて９月から平日週１回と週末企画をランダムに実施することに変更した。

昨年は吉野地域内のみでの活動だったが、今年は名倉、佐野川のイベントなど活動エリアを広げた取り組みなども行うことで交流の幅を広げることができた。

【主な活動内容】

・放課後活動（おにごっこ、カードゲームなどの遊び、工作、講師を呼んでの絵画、お菓子作り、ハロウィン、クリスマスパーティー）
・地域との交流活動（シュタイナー高等部とのさつまいもづくり・サマーフェスへの出店、いちじく農家の看板製作・イベント出店、お月見ドロボウ）

４　事業の成果

吉野地域内の幼児・低学年児童に対する認知は取れているが、子どもの数が少なく、放課後の遊び場を求めるニーズがあまり高まらず、また、働く親が多いことで子どもの送迎がハードルとなり、参加率があまり上がらない。反面、クリスマスパーティーなどの企画を行うと、普段参加のない子どもが友達と一緒に来たり、お母さんと一緒に来たりと吉野以外の地域からも参加が増えた。

昨年から課題である見守りメンバー増が進まずに積極的な告知ができずに終わった。
高校生や地域の方へ講師となりコンテンツ提供をしていただく形での地域交流のきっかけづくりとしては貢献できていると判断する。

５　事業実施団体による自己評価

徒歩圏での同世代の子どもが少ないため、「送迎」が切り離せないことが課題。子どもが少ない現状から鑑みると藤野単位での子どもの放課後の居場所づくりにシフトする必要性を感じている。

また、親の交友関係がハードルとなりがちなため、広く参加できるハードルの低いイベントなどをきっかけに、輪を広げていく必要がある。一方で少子化（子育て世代が少ないこと）への対策としての具体的な取り組みを今後は検討し、持続可能な地域づくりを取り組んでいきたい。

６　今後の展望

地域内外含めた大人向けの体験学習等生涯学習の機会をつくり、地域の方へ先生としてかかわっていただくメリットをつくり、同じ空間で子どもが遊ぶことでの見守り環境をつくっていく。

また、謝礼ではなく関わり合いができることが参加のインセンティブになる組織運営ができるように場の提供と参加者への認知活動を進めたいと考える。

リレートークの会

藤野地区

団体名：リレートークの会

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

図書館を考える会は 20 年以上続いている団体で、これまで「お話を聞く会」を開催してきたが、ここ藤野町には、「お話を聞きたい人」がたくさんいる。さりげなく気楽に「お話をする会」を「リレートーク」する場が必要である。

２　事業の目的

今、藤野では多彩な方々が様々な暮らし方を模索しながら楽しんでいる。そんな人々をリレートークしてより多くの人々に認知してもらう。藤野には、現在、沢山の『多彩な暮らし方、今までの里山のイメージを超えて、クリエイティブな生き方をしている人達がいる。そして、そうした皆さんの連携した活動が、住みやすい街作りとなっている。』と言った現実を皆さんに知ってもらい、町を活性化させていく。

３　事業の実績

コロナ禍で中断したリレートークは、2023 年 6 月 17 日観光協会の佐藤鉄郎氏をかわきりに、土屋拓人、松永あやの、丘修三による「リレートーク」を実現。

リレートークの冊子を 200 部印刷し、藤野総合事務所や観光案内所等に配布をした。

４　事業の成果

藤野は、「森と湖と芸術のまち」と称され今日がある。

戦後の町村合併で成立した「藤野町」を今日のような町につくり上げ、多彩な方々が様々な暮らしを展開している今日を民間レベルで支え活動してきた人々の「マイライフ」を紹介

することで、藤野地区の歴史に触れることができた。

また、多彩な暮らし方を知ることで、聞き手側は自身の生活を顧みるきっかけにもなり、地域との関わりが持てたり、参加者同士でのコミュニティが広がったりした。

５　事業実施団体による自己評価

県の公共関与の産業廃棄物の処理場候補地に指定された時期から「芸術村構想」「シュタイナー学園移転」政令指定都市、相模原市に吸収合併・農業、環境移民、エコシステム、トランジション、パーマカルチャー、等の民間活動を住民の目で記録できた。

６　今後の展望

スピーカーのお話をＱＲコード化して、ＨＰに掲載し、藤野町の様々な活動を全国規模で認知してもらうきっかけ作りになる冊子を作る。（前回は１００部で完売）

藤野駅観光案内所「ふじのね」に常時置けるようにする。

藤野定期便

藤野地区

団体名：藤野定期便

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

里山である藤野には豊かな恵みがたくさんあるが、その恵みをもっと活かせるのではないかと感じることもたくさんある。小規模で有機農作物を育てている農家の農作物を使い、収穫されずに放置されている作物や植物（梅や栗、柚子やハーブや金木犀など）、工芸や手仕事などの技術をもっている方など、藤野の魅力あふれるそれらの作物や技術を魅力ある形にしたら、必要な人に届く消費につながるのではないかと思った。またこれらから魅力あふれるプロダクトを生むことが、藤野という地区の魅力を広く知ってもらえるきっかけになるのではないかと思った。

２　事業の目的

藤野の農作物を原料にしたり、技術を活かしたコンセプト性とデザイン性を兼ね備えたプロダクトの制作と販売を定期便というかたちで行う。制作、販売を通じ、農家、工芸作家、デザイナーなど藤野にいる世代や業種もちがう人たちが関わりあい、協働しひとつのものを作り上げることで地域の活性化を目指す。商品を全国のＥＣサイトやＷＥＢを通して販売宣伝することで、藤野ならではの素材や技術、土地の魅力と高いデザイン性も生み出す文化的な魅力を発信していきたい。そうすることで「藤野ブランド」を確立し、藤野という町や場所で受け継がれてきたもの、今あるものを大事にしながら、新しい藤野の文化として、その魅力を全国に発信していきたいと思う。

発信方法として、インスタグラムなどのＳＮＳを積極的に活用し、たくさんの方に知っていただける同世代、若い世代によりフィットする内容の活動だと思っているため、ＳＮＳでの発信には力を入れて行いたいと思っている。また、藤野ですでにたくさんの実績がある方々にもご挨拶と商品の紹介をし、藤野の人が集う場でもチラシ等での宣伝もしていきたいと思っている。

３　事業の実績

５，６月は昨年度作ったアイテムを新たに製作し販売。６月から地域の生産者や作家にコンタクトを取り始め製造を担ってくれる方、デザイナー、カメラマンとの打ち合わせを開始。７月より商品の発売。７月に地域の藍を使った手織コースター、８月に藤野の鍼灸師さんと

作ったお茶セット。９月に手製本のノート、１０月に地域の農作物を使ったバスソルト、１１月に草木染めのセルフケアアイテム、１２月に地域のデザイナーさんと製作したポストカード、１月にキッチンクロス、２月に木工作家とキッチンワゴン、３月に再び草木染めのセルフケアアイテムと商品をリリース。藤野定期便として商品をリリース後、各月商品をオーダーしていただき、あわせて２６１人の方に商品をオーダー発送した。

４　事業の成果

藤野という場所の豊かな自然を感じていただけるアイテムを地域で小さな規模で生産、製作している方々と協力しながら行い、全国の方にオーダーいただけた。また、今年度は藤野定期便に興味を持ってくれ、オーダーしてくださった方の中から希望の方に、実際藤野にきていただき、製品に関わった人たちと交流してもらうイベントを２回開催したところ、とても好評だった。イベントには鳥取や金沢、名古屋からもお客様が来てくれた。

５　事業実施団体による自己評価

１１ヶ月で１１種類の商品をリリースする中で新たな生産者さんや製造を担ってくれる方との出会いもあり、流れがつかめてきた。

藤野という町の多様性、魅力を伝えられるようなアイテムを作れた。

６　今後の展望

毎月３０００円のサブスクリプションの客数５０人～を目指している。

制作費が仕入れ費、制作費、デザイン費、撮影費などの経費が一回のサブスクリプションで１４万円ほどになるため、５０人の顧客獲得でその回収ができるように目指す。

前期１月～３月の間では最大４５人の方からオーダーいただいた。

藤野ならではの魅力あるプロダクトは好評だった。

より広報活動に力を入れ（ＳＮＳなどを積極的に活用）顧客５０人～１００人を目指し、３年目には１００人～の顧客獲得を目指す。

風の森学び舎～風と水の流れる森づくり　藤野地区

団体名：特定非営利活動法人ふじの里山くらぶ

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

高齢化や若年層の流出により、山や田畑を手入れする人材が減り、藤野地区では荒れた山や藪化した空き地が点在している。荒れた山は獣害により下草がなくなり、保水力が弱り土砂災害が生じやすい状態になっている。

自然豊かな里山環境を将来に残し、災害に強い山林へと育てていくため、地域住民の日常生活で行える作業（手入れ）方法を藤野地区内へ広く伝播させていきたいと思う。

２　事業の目的

自然環境の再生、人が出入りできる山や空き地の整備、地域住民による持続的な行動の浸透をする。

３　事業の実績

・講座形式：計５回（小渕の山２回、佐野川３回）
・作業日：計１５回（小渕の山９回、佐野川６回）
・小渕の山：登山道と沢の整備（倒木の整理、藪払い、土留め、地中の通気通水改善処置）
・佐野川：沢と放棄地の整備（倒木・竹の整理、藪払い、地中の通気通水改善処置）、子どもの遊び場の整備（藪払い、地中の通気通水改善処置）、伐採竹で竹炭作り、キウイフルーツ収穫祭

４　事業の成果

・小渕の山：登山道の景観改善、雨天時のスリップや斜面崩落の抑制
・佐野川：鳥獣害の抑制、子どもの遊び場の水捌け改善、伐採枝・竹の廃棄コストの抑制、住民の交流機会の提供

・講座と作業を通して地域住民へ「人の手でできる里山の環境改善方法」「伐採枝・竹の活用方法」の提案と啓蒙
・ 沢整備の経験を活かしてまちづくり会議環境部会にて沢井川の整備を令和５年１２月に実施し、景観改善に貢献。令和６年度も継続する予定。また、吉野地区の下川橋周辺の沢整備も着手。同様に景観改善に貢献。

５　事業実施団体による自己評価

令和５年度は社会貢献度を高めることに注力し、多くの方が利用する場所の環境改善を進めた。

沢の整備は人力での対応可能範囲が掴め、次年度以降、行政との協働イメージが描けた。

佐野川地区での活動においては、藤野プレーパークと連携し、藤野在住ファミリー層への里山環境保全の啓蒙ができた。

藪払いをかねたキウイフルーツの収穫祭は数十名にご参加いただき、新たな地域交流機会を創出できた。

間伐枝や竹をゴミとせず炭にして財へ転換→整備（手入れ）に利用→改善した場の作物を収穫という循環モデルを構築でき、地域へ提案していける土台ができた。

６　今後の展望

２０２２年から整備している小渕の山、ふじのマレットゴルフ場の変化を事例に、藤野地区内の整備場所を増やしていく。

多くの住民や来訪者が恩恵を受けられる、できるだけ公共に近い場所を選定していく予定。

森のイノベーションラボ FUJINO、藤野観光協会、まちづくり会議を通して地域から広く情報を集め、候補地の選定や実施の調整を行っていく。

子ども達の居場所と地域交流の場づくり

藤野地区

団体名：藤野プレーパーク

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

自然に恵まれた地域でありながら、子ども達が安心して遊べる公園や公共施設がなく、子育て世代が交流できる場もない。昨今のコロナ禍によるライフスタイルの変化でより孤立している親子や移住者が増える中、完全ボランティアにて事業を 2021 年 7 月にスタートした。山主や、名倉地区で何年もかけて森を整備されている地元の方々からの支援を受け、「なぐら湖畔の森」を現状無償にて利用させて頂いている。

２　事業の目的

子どもの健全育成と子育て世代の孤立防止、地域交流の活性化。

３　事業の実績

・「なぐら湖畔の森」及び「石井農園」にて、2023 年 4 月より 2024 年 3 月に掛けて月二回ペースで計 24 回開催。のべ 900 人程度が来場。他に地域イベント協力として観光協会「小さな観光まつり」及び「藤野まるまるマルシェ」に出店した。

・近隣住民に加え、上野原や県内他地域、都内などからも来場。地元民/移住者、公立/私立、新規移住者、移住検討者、外国籍など多様な来場者があった。

・地元の方々を講師として招聘し、植物観察会や昔遊び、しめ飾り作り、バウムクーヘン作り、大地の再生などワークショップを多数開催した。

４　事業の成果

・貴重な野外での遊び場として、子ども達の経験、成長に繋がった。
・年齢・性別・世代や公立/私立/不登校等の垣根を超えた、様々な繋がりが形成されコミュニティの強化に繋がった。
・新規移住者がコミュニティに参加する機会を提供した。
・大きな事故もなく安全に過ごすことができた。

５　事業実施団体による自己評価

公園や児童館のない当地域において、他にない貴重な場として定着した。楽しいというだけでなく、ストレスや孤立、不登校、発達障害や病気など困難を抱える親や子などにとっては、経験者や専門家、同様の困難を抱える人々との交流が随分と救いとなっているのではないかと感じられる。夏からは第二の拠点として、佐野川の石井農園での活動も始まり、基盤を広げることができた。また、他の子育て関連活動や都内のプレーパークとの連携、地域とのネットワーク形成もさらに進んだ。

６　今後の展望

運営メンバー、資金、備品、開催回数を増やし、最終的には常設のプレーパークを目指す。そのため相模原市主催のプレーリーダー養成講座を受講、修了する人員を増やす。将来的な選択肢としては、その実地研修地でもある「銀河の森プレーパーク」の運営を市から委託されている NPO 法人子どもの居場所づくり・相模原(KIDS)所属とし、プレーリーダーが派遣されるシステムにしたい。または参加者からの参加費/ドネーションや企業スポンサー等から運営資金を確保していくか、他の助成金を検討する。

地産ガチャ

藤野地区

団体名：地産ガチャ

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

地域のモノゴトを広く知って頂くメディアとしてガチャガチャが有効な手段と考えた。様々な他事業とコラボレーション可能な地域のカプセルトイ「地産ガチャ」を事業化することで、地域課題の解決、周知を継続的に行うことができると考えている。

２　事業の目的

地域活性化・地域経済の発展・関係人口の創出

３　事業の実績

・５月　相模湖公民館、津久井中央公民館、橋本公民館にマシン設置
藤野のヨガスタジオとのコラボレーション「ヨガチャ」発売　J:COM 番組出演
市民わかば祭り出店　タウンニュース掲載　相模原市プレスリリース掲載
・６月　イベント出店（渋谷ガチャガチャナイト３）　マガジンハウス「colocal」掲載
タウンニュース掲載
・８月　原宿「カフェな。」マシン設置
・９月　「地産ガチャ」商標登録
・１０月　「うそまことカンバッチコレクション」発売
・１１月　イベント出店（サニーサイドウォーク）（地球を笑顔にする広場：TBS 赤坂）
（ＳＣ相模原ホーム最終戦イベント）

・１月　大野北公民館　城山公民館　大沢公民館にマシン設置（相模湖公民館は終了）
・１２月　イベント出店（西部池袋本店「華麗～なるガチャガチャ展」
・２月　イベント出店（渋谷ガチャガチャナイト４」
・３月　相模原市立博物館　マシン設置

４　事業の成果

相模原市内の公民館６箇所、市立博物館への設置、東京都内でのイベント出店により、メディアとしての広がりを見せました。これにより藤野の魅力がより広範囲に拡散できるインフラが整ったと考える。

５　事業実施団体による自己評価

上記に伴い藤野における森林の問題や市民活動などをエンタメ性を持って、収益を還元しながらバックアップできる事業になったと自負している。新商品の開発がやや遅れている点が反省点ではあるが、既存商品の販売が伸びているため、焦らず進めていきたいと考える。

６　今後の展望

・２年度間で設置場所の拡大をしてきたが、自走するにはもう一回り拡大が必要。
・今年度は津久井地区内の公民館３カ所で設置を予定しており、これを機に他の公民館への設置の可能性が出てきた。
・商品開発については、引き続き他団体とコラボレーションすることで、イベント出店、設置場所の紹介など波及効果も生まれると思う。

フリーペーパー「里山ヘッズ」の発行

藤野地区

団体名：山シビレ研究所

１　事業実施の背景や地域の現状と課題

地域における情報交換の場や発信する場がないこと。その場を提供し、発信することで地域の風通しをよくし、楽しめる場をつくること。

２　事業の目的

「里山ヘッズ」を地域になくてはならない情報誌にすること。

「里山ヘッズ１号」は陣馬山をメインに観光施設や飲食店などを交えて魅力を発信する。

３　事業の実績

０号に続き１号を発行。今回は、里山地区の低山の紹介、そして周辺の飲食店の紹介をした。

４　事業の成果

冊子は多くの人が手に取る傾向にあり、ひとつの成果として評価に値すると感じた。ただし、広告掲載に関しては、横のつながり以上の成果を得られておらず、今後の大きな課題となっていく。

５　事業実施団体による自己評価

冊子自体の内容にはある程度の満足がいっているが、進行面や予算取得のための段取りにはまだ問題がある。

６　今後の展望

広告収入の予算範囲内で、藤野や他地区の取材を行い、ニーズに合ったフリーペーパーを制作する。

緑区地域活性化事業交付金　事業評価一覧表

【評価方法】
○評価者1名につき24点満点とし、評価者3名の場合72点満点とする
○評価者のうち1人1項目でも0点がある場合はC評価とする
○得点による3段階評価

評価者数	3名	4名	5名
A評価	65点～72点	87点～96点	108点～120点
B評価	29点～64点	39点～86点	49点～107点
C評価（交付終了）	0点～28点	0点～38点	0点～48点

NO	地区	事業名	団体名	継続年数	評価者	公共性	妥当性	継続性・自立性	波及性・発展性	目標設定	地域性・独自性	合計点	評価	総括コメント
1	橋本	おもちゃの広場による多世代交流	おもちゃの広場はしもと	1	3人	9	10	7	6	9	9	50	B	多世代交流を目的として事業を立ち上げ、参加者の募集などに力を入れた年度であったが、少しずつ活動は広がっていると思う。今後は、収益性の確保に向けた取り組みの検討に期待する。
2	橋本	コミュニティカフェ（地域食堂）	かまどカフェ	1	3人	12	11	12	9	9	9	62	B	地域の集いの場の創出のため取り組んだことは地域の関係強化に寄与している。収入源の確保にも取り組んでおり、今後は事業の拡大に向けた取り組みも期待できる。
3	大沢	散歩普及のためのオレンジバンダナ配布事業	歩いてつながる大沢さんぽの会	1	3人	9	7	8	7	9	7	47	B	団体の活動とバンダナの活用方法について、更に検討を重ねより高い効果が発揮できることを期待する。
4	城山	しろやま☆おせっかい	城山地区まちづくり会議　高齢者とともに築き支える地域づくり部会	2	3人	9	7	6	7	5	10	44	B	「しろやま☆おせっかい」の取組を継続するためには、城山地区社会福祉協議会や城山地域包括支援センター等の関係機関との協力・連携が必要と考える。地域で取り組んでいる様々な活動と連携を図り、城山地区に「おせっかい風土」が広く根づく取組を期待する。
5	城山	城山湖ヒルクライムアタック雌龍籠山ステージ	城山湖ヒルクライム実行委員会	3	3人	9	8	7	7	10	11	52	B	ヒルクライム競技の運営に関しては、地元関係団体などの協力を得ることができ、イベントの定着度が向上したものと考える。観客用送迎マイクロバスの運行などの新たな試みを実施しており、今後の事業の発展や観光振興に努めたことが評価できる。今後は、更なる認知度向上に努め、オリンピックレガシーにおける自転車ツーリズムの普及を図り、シティープロモーションの推進をさらに進めてほしい。
6	城山	みんなの津久井湖夏祭り	みんなの津久井湖夏祭り実行委員会	1	3人	10	9	12	12	9	9	61	B	地域の各種団体及びボランティアの協力により、若い人が中心となって地域一体の事業運営がされており、また、課題となっていた「安全の確保と渋滞の回避」について、警備員やボランティアの配置増、新たな駐車場の確保、シャトルバスの運行により課題を解決し、今後の事業の発展や観光振興に努めたことが評価できる。
7	津久井	米・大豆等の栽培で持続するまちづくりを目指す事業	「農園会」	2	3人	9	9	10	11	10	9	58	B	活動を通して連携団体との協働体制が整いつつあり、地域のコミュニティづくり及び関係人口の拡大創出に寄与されている。酒米等の収穫量による売買益により、事業計画に大きなブレが生じるため、安定的な事業経営に向けた収入源の確保に向けた検討を期待する。

NO	地区	事業名	団体名	継続年数	評価者	公共性	妥当性	継続性・自立性	波及性・発展性	目標設定	地域性・独自性	合計点	評価	総括コメント
8	津久井	鳥害獣の食害防止・駆除により農林業の促進を図る	長竹地区鳥害獣自主防衛隊	2	3人	9	7	6	8	9	8	47	B	野生鳥獣の被害が著しい地区において、主体的な取組を講じ、当該地区の被害防止の意識向上に努めたことは評価に値する。より効果的な事業となるよう、当該地区から隣接地区と連携できるような体制づくりに期待する。
9	津久井	自然災害伝承事業	自然災害伝承碑「地震峠」を守る会	2	3人	12	9	11	12	12	11	67	A	周辺地域の生徒・学生と共に本事業へ取り組まれたことは、若年層への継承にも繋がり評価できる。来年度も引き続き、伝承事業をとおして、相模原市内にとどまらず、全国的にリードできるような事業となることに期待したい。
10	相模湖	わくわく・さがみこ創り	相模湖地域連絡会	2	3人	9	6	7	8	7	8	45	B	他団体や地域の方々と連携して事業に参加する等、新しい相模湖についてPRすることができている点が評価される。
11	相模湖	『小原の奴』継承人材育成事業	甲州街道小原宿本陣奴会	2	3人	11	10	11	10	10	11	63	B	青少年の健全育成や地域活動の情報発信、地域の文化・伝統の振興に貢献していることが評価される。
12	相模湖	相模ダムカレー・ダムプレート事業	相模ダム観光推進協議会	2	3人	12	12	7	8	8	9	56	B	地域の複数の団体から参加したメンバーで地域の店舗と連携し、相模湖についてPRする新たな事業を開始することができた。
13	藤野	葛原地域環境整備事業	葛原有志の会	1	3人	9	10	8	8	9	7	51	B	地域住民や登山客が利用していた休憩所の屋根を修繕したことにより、雨漏りの心配もなくなり、より安心して利用できる休憩所となった。また、休憩所周辺の環境を整備することで、葛原地域が安心して訪れられる空間となったことは、当会の活動の実績と考える。来年度は更に休憩所とその周辺が気持ちよく過ごせる空間となり、またこの活動が広く地域に浸透し、多くの人が参加できる活動になることを期待する。
14	藤野	しのばら園芸市	しのばら園芸市実行委員会	1	3人	9	8	8	7	7	9	48	B	地域及び大学生と連携し活動を行っていることは評価できる。12月のしのばら園芸市のプレ開催についても200人以上の来客があり、またメディアに取り上げられたことは、藤野地区内外に魅力を発信できたと考える。次年度においても、関係団体等との連携を深め、活動してほしい。
15	藤野	赤沢環境整備プロジェクト	上野久保 杜を守る会	1	3人	9	8	6	6	6	7	42	B	災害の未然防止も含めた登山道の整備を行い、地域の安全・安心に貢献している。また、この活動により、ハイカーが増えたことや生物多様性を考えた手法を取り入れ、植物が生えやすい環境を整備できたことは評価できる。地域には、活動状況を定期的に報告することで、地域住民に活動を知ってもらう取組も事業を継続する上で必要なことと考える。次年度以降も事業の継続及び周知をし、環境が整備されることを期待する。
16	藤野	雑穀普及活動	藤野あわ・きび・ひえの会	2	3人	6	6	6	6	6	6	36	B	栽培体験は、天候や雑穀の生育状況により、日程を定めにくい部分があるが、「雑穀栽培のてびき」を作成したことで、栽培体験に参加できない方々にも栽培方法を伝える術を獲得できたことは評価できる。健康食品として雑穀を普及するため、今後、地域の食堂での利用に期待したい。

NO	地区	事業名	団体名	継続年数	評価者	公共性	妥当性	継続性・自立性	波及性・発展性	目標設定	地域性・独自性	合計点	評価	総括コメント
17	藤野	みんなの教室事業	オープンスペースよりどころ	1	3人	9	9	7	7	7	7	46	B	通常の活動とイベントを開催することで、遊び場の少ない町内の子どもたちに交流の場を与え、他地域からの参加が増えたことは評価できる。以前からの課題である子どもを見守る大人の存在については、地域情報紙などで広く周知することや吉野地区内の自治会などに相談して、子どもの見守りに関する知恵をいただくことも必要と考える。
18	藤野	リレートークの会	リレートークの会	2	3人	7	6	7	7	6	6	39	B	地域で活躍している方の話を聞くことは、藤野の今日までの歴史に触れられるのと同時にスピーカーの生き方を学び、自身の生活に活かすことができる。また、HPを通して、地区内外に発信することで、広く藤野の歴史を広げられ、多彩な方が藤野に住んでおり、活動的なまちであることを認知してもらう取組も評価できる。今後についてもスピーカーは移住してきた方が多く見受けられるため、地元の方にも協力を得て地元住民、移住者関係なく、幅広い層の方が語れるような場を提供してほしい。
19	藤野	藤野定期便	藤野定期便	2	3人	6	5	5	5	6	6	33	B	地元で生産されている材料を使ってアイテムを制作し、藤野の魅力とともに発信し、商品購入者を招待したイベントを開催した本事業は、地域活性化に資する事業と言える。来年度は更に商品の受注数を多くするための取組も行い、幅広い生産者と繋がりを持って、地域内外に藤野地区のPRを進めてほしい。
20	藤野	風の森学び舎～風と水の流れる森づくり	特定非営利活動法人ふじの里山くらぶ	2	3人	9	9	8	8	8	9	51	B	ハイキングコース等の環境整備を行うことにより、観光客が安心して登山できるとともに、土砂災害も防ぐことができている。活動を通して、他団体や地域事業者と連携して山の整備ができ、藪化していた箇所やハイキングコース等の環境整備を行うことにより、観光客が安心して登山できるとともに、土砂災害も防ぐことができていることは評価できる。活動のフィールドについても増えているため、今後も地域と連携して取り組んでほしい。
21	藤野	子ども達の居場所と地域交流の場づくり	藤野プレーパーク	3	3人	8	8	6	6	6	8	42	B	他地区からも来場者があるプレーパークは、地域を超えた交流が生まれていると評価できる。また、活動場所を名倉の湖畔の森だけでなく、佐野川の石井農園での活動も始動し、地域の方の協力を得て活動場所を広げられたことは評価できる。
22	藤野	地産ガチャ	地産ガチャ	3	3人	7	8	7	7	9	9	47	B	ガチャマシン設置場所の増加やメディア等への露出の機会が多くなったことで、藤野地区の魅力をガチャを通して全国に発信できたことは、当団体の活動の実績と考える。来年度以降も活動を継続し、魅力ある地産ガチャを制作して、藤野地区の知名度の向上等に努めてほしい。
23	藤野	フリーペーパー「里山ヘッズ」の発行	山シビレ研究所	3	3人	5	5	5	6	6	5	32	B	藤野やその周辺の低山や飲食店を紹介することによって、藤野地区を訪れるハイカーや観光客などの交流人口の創出に繋がったと考える。今後も継続して里山ヘッズの制作をしていくためには、自主財源の確保が必要となるため、広告収入を得るための関係性を築いていき、計画的に実行されることを期待する。

潤水都市 さがみはら

令和５年度実施

緑区地域活性化事業交付金活用事例集

編 集
緑区各まちづくりセンター
発 行
相模原市 緑区役所 地域振興課
相模原市緑区西橋本５－３－２１
電話 042-775-8801